

シンポジウム、ワークショップ、講演会の開催記録、
および京都大学シンポジウムについての外部評価

■ 講演会

第7回講演会

講師：Ruth Sitton（Ben Gurion University of the Negen，東大客員研究員）

企画：やまだようこ、子安増生

共催：教育認知心理学講座

日時：2003年5月9日 13:00－14:30

場所：教育学研究科1F第1講義室

題目：Drawing to differentiate: Flexibility in young children's human figure drawing.

要旨：The present paper reports a study concerned with: a) how children's ability to differentiate between men, women, boys and girls in their drawings changes between 4 and 6 years of age, and b) how the introduction of a communicative context for drawing affects such differentiation. Data collected from 72 Israeli children revealed increasing differentiation between human figures across the age range studied, with qualitative changes in the types of cue used. The introduction of communicative context had no effect on children's drawings at 4 years, significant though complex effects at 5 years, and significant effects of a more predictable nature at 6 years. Results are discussed in terms of children's use of hierarchy of cues to establish differentiation.

成果：参加人数は約80人。イスラエルから招いたシトン先生の話は、臨床研究と発達研究の境界領域にあり、描画の具体例をふんだんに紹介されて、学部生にもわかりやすく興味深いものであった。

第8回講演会

講師：Sherry R. Shepherd（京都文教大学心理臨床センター）

企画：岡田康伸

日時：2003年5月9日 17:00－19:00

場所：文学部東館第3実習室

テーマ：「箱庭表現の“解釈”の実際」

概要：箱庭を“解釈する”というとき、セラピストは、クライエントのどのような表現に目を向け、どのように意味づけるのか、個人や文化を超えた象徴性にも注目しながら、箱庭療法の事例の検討を通してディスカッションする。

参加人数：25人

成果：治療場面で作られた一連の箱庭表現から、シンポジウム参加者それぞれが何をどのように読み取るか、を出発点にディスカッションすることで、箱庭表現を解釈する際の視点について知見を広げることができた。

第9回講演会

講師：川寄克哲（学習院大学文学部心理学科）

企画：河合俊雄

日時：2003年5月28日 17:00－19:00

場所：文学部東館第5実習室

テーマ：「夢のとらえ方の本質と個性」

概要：事例の中の同じ夢について、何名かの心理療法家にコメントしてもらい、それを比較検討し、夢へのアプローチにおいて何が本質的であり、またどのような個性が見られるかについて発表およびディスカッションする。

参加人数：40名

成果：三名の心理療法家がそれぞれの観点から行ったコメントを、参加者全員で共有し、検討

した。治療者自身の観点との比較検討もあり、夢に対しての観点は非常に多様であること、それぞれの観点の中に夢へのアプローチの本質が示されていることが議論された。

第10回講演会

講師：高野祥子（高知心理療法研究所）

企画：岡田康伸

日時：2003年6月25日 17:00-19:00

場所：文学部東館第3演習室

テーマ：「箱庭表現にあらわれる心の深層」

概要：箱庭には、ときとしてクライアントのこころの非常に深い層から来ると思われるものが表現される。そうした表現の続いた箱庭療法事例を検討することを通して、心の深層について理解を深めるとともに、このような「深い」表現を可能とするクライアントとセラピストの関係性のありようについてディスカッションする。

参加人数：35人

成果：見る者を圧倒するような箱庭表現を継続的に作った青年期男性の事例の発表を通して、心の深い層からくるイメージに触れるとともに、「生と死」あるいは、「宗教性」など、人間の存在の根底に関わる問題についてディスカッションすることができた。

第11回講演会

講師：星 英司（ピッツバーグ大学医学部）, Christos Constantinidis（Wake Forest University）

企画：船橋新太郎

日時：2003年7月26日

場所：総合人間学部1号館1階1102講義室

題目："Functional perspectives of the frontal lobe in generating action: from prefrontal cortex to primary motor cortex." Eiji Hoshi (University of Pittsburgh School of Medicine)

複雑な随意運動（視覚的な指示により決められた目標位置に向かって順序立った運動を行う）のプログラミングや制御に前頭葉の前頭連合野背外側部、運動前野、補足運動野がどのように関わっているかを、サルを用いた神経生理学的研究成果をもとに詳しい解説が行われた。前頭葉の各領域における機能分化の様子、それぞれの領域で担われている機能を発現する神経メカニズムがわかりやすく解説された。

"Neurophysiological studies of working memory in the primate prefrontal and parietal cortex." Christos Constantinidis (Wake Forest University School of Medicine)

作業記憶（ワーキングメモリ）の神経機構（特に情報の一時貯蔵メカニズム）に関する神経生理学的研究成果が報告された。空間情報の作業記憶を必要とする課題をサルに行わせ、前頭連合野背外側部と後頭頂連合野からニューロン活動を分析し、特徴を比較した結果、両者ともに空間性視覚情報の処理に関わっていることがわかるが、前頭連合野では作業記憶などより高次の認知機能に関わることが、わかりやすく解説された。

成果：講演会の開催日が他の企画の開催日と重なっていたこと、講演会の直前の日本神経科学学会において同様の企画を実施したことなどから、参加者が予想以上に少なかったが、各講師には各自約3時間にわたって講演と討論に参加してもらい、今までの研究成果を詳細に報告してもらった。短時間の発表や討論では味わえない講演者の思考の歴史を含む講演や、その後の長時間にわたる討論により、講演者の考えや研究戦略を十分理解することができた。神経生理学、生理心理学に関わる院生が参加者の中心であったが、大変貴重な経験をしたと思われる。参加人数は24名であった。

第12回講演会

講師：Randolph J. Nudo（カンザス大学医療センター）

企画：松村道一、内藤栄一

日時：2003 年 7 月 26 日 14:00－17:00

場所：京都国際会館 RoomD

題目：「脳の再組織化と運動機能回復」

概要：高齢化社会を迎え脳卒中の発症率が増加する現代社会において、卒中からの社会復帰が重要性を帯びてきている。Nudo 博士は動物モデルを用いて、卒中後の脳機能回復時に実際に脳で何が起きているかを研究している世界の第一人者である。卒中後の脳機能回復に伴い脳内では生来的に存在しなかった脳領域間の新しい神経結合や神経薬理学的変化などが盛んに起こっている事実が 3 時間以上にわたり、わかりやすく解説された。さらに電気刺激を用いた全く新しい 21 世紀型の脳機能回復治療法も紹介され、聴衆から絶賛を浴びた。

成果：リハビリテーショントレーニングの現場で働く理学療法士、作業療法士および大学生ら約 250 名の参加者があった。英語も同時通訳システムを導入して翻訳されたため、英語が不得意な参加者も十分に講演内容が理解できた。この講演内容は現在書籍として出版準備中である。

第 13 回講演会

講師：M. Nicolelis (Duke University, USA)

企画：櫻井芳雄

日時：2003 年 8 月 2 日 16:00－17:30

場所：文学部新館新館 1 階第 2 講義室

題目：Computing with Neural Ensembles

概要：脳神経活動で機械を操作する Brain-Machine Interface (BMI) の研究は、情報工学的な開発、臨床医学的な応用、あるいは脳自体の解明まで、多様な目的を持つ。本講演では、BMI 研究の先駆者であり現在もその最先端を走り続けている Nicolelis 教授が、最新の研究成果を紹介する。また、パーキンソン病で脳に障害をもつ患者さんへの臨床応用の試みについても、予備的な結果を含めて紹介する。そして、今後の BMI 研究の方略と可能性について議論する。

成果：世界的な広がりを見せる BMI 研究のトップランナーによる、きわめて刺激的で有意義な講演であった。参加者からの質問も多く、京大心理学研究室をはじめとして、今後国内の各大学や研究所で進展するであろうこのテーマに対し、重要な視点を提供するものであった。

参加人数：京都大学の各部局と他大学（京都産業大学他）から計 30 人ほどが集まった。

第 14 回講演会

講師：宮川 剛 (京都大学医学研究科 先端領域融合医学研究機構)

企画：櫻井芳雄

日時：2003 年 9 月 3 日 16:30－18:00

場所：文学部新館 2 階第 4 講義室

題目：「遺伝子と行動：遺伝子改変マウスの行動解析と統合失調症患者 DNA を用いた相関解析による統合失調症感受性遺伝子の同定」

概要：遺伝子と行動の関係は古くから心理学の大きな関心の的であったが、どの分子をコードする遺伝子が、どのタイプの行動や精神現象に影響を与えているのかを直接調べることは不可能であった。しかし、近年、マウスの遺伝子を自在に操作することが可能になったことと、ヒューマンゲノムプロジェクトにより遺伝子の染色体上の位置や DNA の配列が解明されたことにより状況は一変した。最近、演者はマサチューセッツ工科大学の利根川進博士、ロックフェラー大学の Maria Karayiorgou 博士らと行った一連の共同研究により、統合失調症（精神分裂病）に関与する遺伝子を同定した。この遺伝子は脱リン酸化酵素のカルシニューリン（CN）をコードする遺伝子であるが、CN を介した細胞内シグナル伝達経路は極めて詳細に知られているため、これまでよくわかっていなかった統合失調症発症のメカニズムの解明は今後飛躍的に進むと考えられる。これを例に、遺伝子と行動の関係についての研究の最先端の現状を紹介する。

成果：最先端の遺伝子改変技術を活用した行動実験の成果と意義について、きわめてわかりや

すく紹介した有意義な講演であった。特に、心理学出身者がこのような最先端の技術を使い世界的な成果を挙げていることは、心理学の若い研究者を大いに勇気づけるものであった。
参加人数：京都大学の各部局と他大学（同志社大学他）から計40人ほどが集まった。

第15回講演会

講師：やまだようこ（京都大学教育学研究科）、川野健治（国立精神・神経センター精神保健研究所）

企画：やまだようこ

日時：2003年10月5日 13:00-17:00

場所：人間・環境学研究科地下会議場

題目：やまだようこ「喪失の語り---大切な人を亡くしたときの語り」

概要：きみはまだ若いからこの現実世界で見喪って、それをいつまでも忘れることができず、その欠落の感情とともに生きているという、そういうものをなくしたことはないだろう？まだ、きみにとって空の、百メートルほどの高みは、単なる空にすぎないだろう？・・・それとも、今までなにか大切なものをなくしたかね？大江健三郎「空の怪物アグイー」

人生のさまざまな時期に人は喪失に出会う。子どもだって大切なものを失う。机の引き出しのなかにこっそりしまっていたきらきら光る宝物のような蝶々の羽を無くしたときの悲しみは、大人にとってはとるにたらないものであっても、当の子どもにとっては忘れられないくらい切ない記憶だ。私がライフストーリー、特にそのなかでも「喪失」という観点に注目するようになったのは、今まで大きな物語として、「獲得」、「進歩」、「回復」、「成功」ストーリーが語られてきたことがあげられる。喪失に眼を向けることは、人間の人生のポジティブな部分だけではなく、ネガティブにみえていた部分をも視野に入れ、さらにはその明暗の価値逆転をすることで、両行するものの見方をする眼をもつことになる。また、語ることは、それ自体が「喪失」を経験することである。ことばは、人生の経験を語るには不十分な器である。語るという行為は、喪失に直面しながら、ことばの不十分さを自覚しながら、それでもいくぶんかのことばを紡いで、それで何かを伝えようとするアクチュアルな実践である。今回は、大切な人を亡くしたときの二人称的な「語り」の特徴を、仮定法などを用いた「想定された現実」の語り、「死者に見守られる」という想像世界の語りという観点から考えてみたい。また、生と死のぎりぎりの境界にあるとき人は何を語るか、その特徴についてもふれてみたい。

題目：川野健治「喪失の語りの喪失---自殺によって遺された人々の語り」

概要：2000年に（あしなが育英会の）自死遺児・遺族によるはじめての文集「自殺っていけない」が発行され、大きな反響をよびました。この「いけない」とはどのような事態でしょうか。自殺によって遺された人々の自己物語りの共通点の一つは仮定法過去によって表現される自責の念です。

「あの時、もう少し気をつけていたら止められたのかも知れない」。この可能性をめぐる語りは苦しく、そして「語りえないという語り」が構成されているのかもしれません。同時に自殺によって遺された人々は、社会からの拒絶的・批判的態度や周囲の人々との気遣いの相互作用の中で、その経験を語る機会を失っていきます。自殺によって遺された人々への面接、支援組織での聞き取り、あるいは文集や質問紙調査など二次的な資料とあわせながら、この「いけない」という状況を入り口として、自殺によって遺された人々の自己物語りを考えていきたいと思います。

成果：参加人数は約150人。近年、大きな注目をあびている「語り（ナラティブ）」「ライフストーリー」「オーラルヒストリー」研究の最前線を扱う研究会であった。「死の語り」という重いテーマを、具体的な事例を交えて発表され、一時は会場が沈黙につつまれたあと、心理学、社会学、人類学、比較文学など学際的なメンバーによって活発に討議された。

第16回講演会

講師：マーク海野（京都大学客員助教授）、山中康裕（京都大学教授）

企画：伊藤良子、黒川嘉子

日時：2003年10月5日 13:00-17:00

場所：京大会館

テーマ：「現代日本社会における心の病と宗教性」

概要：マーク海野氏は、オレゴン大学東アジア宗教学部助教授でおられ、河合隼雄氏の「明恵夢を生きる」を翻訳されるなど、日本文化や日本人の心への造詣が深く、研究・教育活動にご活躍されています。この度、京都大学臨床教育実践研究センターの客員助教授としてお迎えいたしました。本公開講座では、現代日本社会が抱える心の病について、宗教心理学の立場からご講演いただきます。また、山中康裕氏との対談も企画しており、心理臨床と宗教性をテーマとして、心の深層にふれる機会にしたいと思います。

成果：現代日本社会が抱える心の病を、心の深層にある宗教性という視点からみることにより、より普遍的なテーマとして検討することができた。心理臨床関係者や宗教学の専門家だけではなく一般の方々まで幅広い参加者が、積極的に討論に加わり、それぞれが宗教性について考える機会となった。参加人数は86人。

第17回講演会

講師：今井むつみ (慶應義塾大学環境情報学部)

企画：吉川左紀子

日時：2003年10月10日 13:00-14:30

場所：教育学研究科第1講義室

題目：「ことばの意味の獲得に制約となるもの-名詞・動詞をめぐって-」

概要：一般には、大人がひとつひとつのことばを丁寧に繰り返し教え込むことによって、子どもはことばを学習していくと考えられているかもしれない。しかし、実際には子どもはことばがその指示対象の少数の事例（多くは一事例）と結び付けられるのを観察するだけである。一事例に対する漠然とした指差しから発話されたことばの意味を推論することは論理的には不可能なことである(Quine, 1960)。にもかかわらず、子どもは、2～6歳の間に、一日平均6語、多い時期には10語も新しいことばを覚えるといわれている。本講演では名詞と動詞に焦点をあて、子どもがどのような知識と方略(制約)を用いて一事例からことばの意味を推論しているのか、その知識や方略が発達的にどのように変わるのかなどについて議論する。

成果：ことばの獲得を可能にする心理的制約の特性について、長年、実証研究を積み重ねてきた講師による講演会。理論的背景の説明に始まり中国の幼児を対象とした最新の知見まで、盛りだくさんの内容を緻密に、かつ分かりやすくお話し頂いた。本講演会には学外からの参加者も交えて、約40名が参加した。

第18回講演会

講師：Philippe Rochat (Emory University)

企画：板倉昭二

日時：2003年10月15日 16:00-18:00

場所：文学研究科2F第4講義室

題目：「乳児における自己」

概要：ヒト乳児における基本的自己の発達を、生態学的自己、対人的自己の発達過程に焦点を当て講演をおこなう。

成果：ヒト乳児において、環境と自分を分離して知覚する基本的な自己から、他者の心を理解する主体としての自己へとつながる発達の経路を証明する最先端の知見を共有することができた。約30名が参加した。

第19回講演会

講師：Janellen Huttenlocher (シカゴ大学)

企画：楠見 孝

日時：2003年11月25日 16:00-18:00

場所：教育学研究科 1 階第 1 講義室

題目：Spatial Codings that Support Changes in Location

概要：I will present new findings concerning an adaptively important ability of mobile creatures to code information about their spatial environment and maintain that information when they move to new locations.

成果：A チーム主催講演会として実施し、学内外から約 30 名の参加者があった。空間認知とその発達に関する話題提供と活発な討論を行った。

第 20 回講演会

講師：西田豊明（東京大学情報理工学系研究科/京都大学大学院情報学研究科）

企画：吉川左紀子

日時：2003 年 11 月 28 日 13:00－14:30

場所：教育学研究科第 1 講義室

題目：「社会知デザインと会話情報学」

概要：社会知のデザインと会話情報学の 2 つのキーワードを中心に、人間社会の知識の創造に役立つコミュニケーションメディアを創出し人間社会への埋め込むための方法論の開発を行っている。社会知とは、社会の構成員が社会を活用し、社会のなかで活動する能力、および、社会が全体として持っている問題解決や学習能力を意味する。社会知のデザインは、構成員の間の創造的なインタラクションを創発するコミュニケーションメディアの研究開発をめざした研究領域であり、情報通信技術や社会科学の幅広い技術を統合して、技術が埋め込まれる人間社会の社会知の向上を図る。一方、会話情報学では、会話という人間にとって最も自然なコミュニケーションを理解し、それを支援するための情報技術あるいは会話のもつ長所を取り入れたコミュニケーションメディアの開発をめざす。本講義では、会話情報学を軸とした社会知のデザインの構図を示し、基本的な事項と考え方を紹介する。

成果：人同士のコミュニケーションを支援する、新しいメディア開発に携わって来られた講師を招いて、情報工学の現在とその将来像を教育実践の具体的データなども交えてお話し頂いた。問題解決、学習能力、コミュニケーションという心理学の主要な研究テーマに対する、情報工学の立場からの最新の研究成果を知る、貴重な機会であった。本講演会には、学外からの参加者も交えて約 30 名の聴衆が参加した。

第 21 回講演会

講師：岩宮恵子（島根大学教育学部）

企画：河合俊雄

日時：2003 年 11 月 30 日 14:00－17:00

場所：芝蘭会館

テーマ：「心理療法場面における夢について」

概要：心理療法場面において、夢はどのように扱われるのか。心理療法家は、クライアントの語る夢についてどのように理解すべきか。心理療法の事例の検討を通してディスカッションする。

参加人数：30 名

成果：クライアントの夢に対する治療者の観点なども講演内容に含まれており、クライアントの夢を治療者がどのように理解しているのかが明快に示された。夢をどのように理解するかは治療とは何かということと繋がっており、夢の議論を通じて治療者の治療スタンスを知ることができた。心理療法の目標にまで話題が及び、白熱した議論が行われた。

第 22 回講演会

講師：高野祥子（高知心理療法研究所）

企画：岡田康伸

日時：2003 年 12 月 3 日 17:00－19:00

場所：文学研究科東館第 3 実習室

テーマ：「箱庭表現にあらわれるこころの深層（続）」

概要：6 月のシンポジウムの続編として、今回もこころの非常に深い層からきたと思われる表現が続いた箱庭療法の事例を検討することを通して、人間のこころの深層について理解を深めるとともに、クライアントとセラピストの関係性を基盤として、そうした「深い」表現が生まれてくる過程の機微についてディスカッションする。

参加人数：38 人

成果：不安神経症の症状を訴える中年期男性の箱庭療法過程を検討し、繰り返し表現された「死別した家族への祈りのテーマ」についてディスカッションすることを通して、症状の発生に深く関わっている「宗教性」の次元における問題に対する理解を深めることができた。

第 2 3 回講演会

講師：西村洲衛男（椋山女学園大学）

企画：岡田康伸

日時：2003 年 12 月 10 日 17:00－19:00

場所：文学研究科東館第 3 実習室

題目：「高齢者による箱庭表現の諸特徴について」

概要：超高齢化社会を迎えつつあるわが国においては、高齢者に対する心理面からのサポートの充実が期待されている。今回のシンポジウムでは、高齢者による箱庭表現の特徴について検討し、高齢者の心理的世界について理解を深めるとともに、高齢者に適した箱庭療法のあり方についても併せて議論する。

参加人数：24 人

成果：高齢者の箱庭表現をもとにディスカッションすることで、高齢者に独特の表現について知見を広げることができた。また、高齢者にとって箱庭を作ることの意義についても議論することができた。

第 2 4 回講演会

講師：石井 均（天理よろづ相談所病院）

企画：皆藤 章

日時：2003 年 12 月 13 日 14:00－17:00

場所：文学研究科東館第 3 実習室

題目：「糖尿病患者の心理と行動－自ら治療することへの援助－」

概要：糖尿病は、いまや 10 人に 1 人の病と言われる。しかし、糖尿病を抱えて生きる人たちへの心理援助は、まだ端緒についたばかりである。今回のシンポジウムでは、医療現場で糖尿病を抱えて生きる人たちに長年付き添ってきた医師の講演と事例検討を通して、糖尿病患者への心理的理解と心理臨床的な援助のあり方について、討論を深める。

成果：石井均講師より、糖尿病医療における研究成果とそれがもたらした功罪が簡潔に説明され、御自身が取り組まれた、患者への心理的理解の研究成果と援助の事例が報告された。今までの「血糖コントロールが悪いのは患者の認識不足であり、もっと糖尿病に関する教育が必要だ」という発想では見落とされて来た、「血糖コントロールをできていない人ほど、実は心理的負担が高い」ということが実証的に述べられた。そして、糖尿病というものが、医療従事者が「糖尿病の知識はあっても、糖尿病を抱えている患者のことは知らない」のでは治療できない病であるというところから出発する視点の重要性を事例と共に示された。また、後半のディスカッションでは、フロアとの間で活発な質疑応答、意見交換がなされた。

第 2 5 回講演会

講師：山上敏子（久留米大学）

企画：山中康裕

日時：2003 年 2 月 14 日～15 日

場所：聖護院御殿荘（京都市左京区）

テーマ：行動療法的視点から見た心理臨床事例検討

概要：心理療法には多種多様な方法論が存在する。それぞれが個性を深めていくことと同時に、お互いを交流させていくことが臨床的にも学問的にも有意義なものとなり得ることは言うまでもない。今回は、久留米大学の山上敏子先生をお招きし、青年期女性の事例と強迫症状の事例の二つについて、特に行動療法の立場から検討して頂く。事例提供者はもちろん、参加者全員の、本事例についての理解が深まるとともに、新たな視点が模索されることを目的とする。

参加人数：130 人

成果：普段あまり接することのない行動療法の視点あるいは精神科医の視点を充分に取り入れた事例検討を行うことができた。その結果、行動療法あるいは精神医学と心理療法との共通の基盤が明らかになると共に、われわれ心理療法固有の有効性や限界や可能性を改めて認識することとなった。

第 2 6 回講演会

講師：藤村 聡（京都大学医学部附属病院遺伝子診療部、藤村医院院長）

企画：伊藤良子

日時：2004 年 3 月 14 日（水）13:00—16:00

場所：京都大学文学部東館 3 階伊藤研究室

テーマ：遺伝カウンセリングにおける事例検討会

概要：京都大学遺伝子診療部では、医師と心理スタッフの連携のもとに遺伝カウンセリングが行われている。今回の事例検討会では、心理スタッフより遺伝カウンセリングにおける心理療法の過程を事例提供し、京都大学遺伝子診療部の藤村医師コメントをしていただく。心理的側面、医学的側面の双方から事例を検討し、来談者の援助のあり方について議論する。

第 2 7 回講演会（開催予定）

講師：Gavin Bremner (Lancaster University)

企画：子安増生

日時：2003 年 3 月 25 日 16:00—17:30

場所：京都大学時計台記念館 2 階 国際交流ホール

題目：Constraints on young Infants' perception of object trajectories.

概要：Central to our experience of the perceptual environment are notions of object continuity, the understanding that an object maintains its location or trajectory upon becoming occluded. Infants have been claimed to possess such concepts innately, but such accounts are based on violation-of-expectation methods, which have been criticized for insufficient controls and the possibility that lower order perceptual factors can explain the results.

Recently, application of recovery-to-novelty methods to the issue of trajectory continuity have yielded findings inconsistent with innate object concepts. Four-month-olds were first habituated to a ball moving back and forth behind a box, such that the central portion of the ball's trajectory was occluded (Johnson, Bremner, Slater, Mason, & Foster, 2003). After habituation, the infants were presented with test displays in which the box was removed and the ball shown on a complete trajectory, or a "broken" trajectory, with a gap such that the ball seemed to disappear and then reappear on the other side of the display. The infants exhibited a reliable posthabituation preference for the complete trajectory, suggesting that they perceived the occlusion display viewed during habituation as more

similar to two discontinuous trajectory segments than to a ball that moves on a continuous trajectory. When 4-month-olds were habituated to a similar display with a narrow occluder, however, this posthabituation preference pattern reversed, suggesting that object continuity was perceived when spatiotemporal demands were eased.

Further research explored the conditions under which 4-month-olds will perceive object continuity in occlusion displays, by manipulating spatiotemporal characteristics of the stimuli. Given that previous work yielded positive results when the screen was narrow, either time out of sight or distance across which the object's trajectory must be interpolated could be important in determining whether infants perceive continuity. Thus, in the first condition, infants were habituated to a wide screen display in which the ball emerged immediately on the other side upon occlusion (the "fastball" event). In the second condition, infants were habituated to a narrow screen display and the ball emerged after a delay (the "slowball" event). We reasoned that if time out of sight determines perception of object continuity, independent of distance of interpolation, then positive results (indicating perception of continuity) would be obtained in the first condition. If, however, distance of interpolation determines perception of object continuity, independent of time out of sight, then positive results would be expected in the second condition. Interestingly, positive results were obtained in both conditions, providing evidence that both these spatiotemporal factors are important. Further work indicates the perception of trajectory continuity is limited to the case of an object moving on a horizontal trajectory.

These results indicate that infants' perception of object continuity is closely tied to stimulus characteristics, and that concepts of an object's existence upon occlusion are fleeting and not robust. Such findings provide strong evidence against innate object concepts, and are consistent with the thesis that such concepts arise from perceptual experience and emerging cognitive skills.

第 27 回講演会（開催予定）

講師：Douglas L. Medin（アメリカノースウエスタン大学）

企画：藤田和生

日時：2003 年 3 月 26 日 15:00－16:00

場所：京都大学時計台記念館 2 階 国際交流ホール

題目：The Native Mind.

概要：The psychology of categorization and reasoning has relied heavily on studies using participants (typically college students) in and around major research universities. How well do the findings from these populations generalize to other populations? Our research team has been examining this issue in the domain of biological concepts. This talk describes a cross-cultural and developmental research project on native or folk biology; that is, the study of how people conceptualize living kinds. >From the standpoint of mainstream cognitive psychology, we find that results gathered from standard populations in industrialized societies (e.g. typicality effects) either are not found or pattern differently when we move beyond undergraduates. From the perspective of folkbiology, standard populations may yield misleading results, because such populations represent examples of especially impoverished experience with respect to nature.

■ ワークショップ

第 4 回 ワークショップ（集中講義およびワークショップ）

講師：Emmanuel Manalo（University of Auckland）

企画：子安増生

日時：2003 年 5 月 15 日～21 日

場所：文学研究科東館C O E 会議室、教育学部 2 F 中央装置室

May 15, Workshop 1: Some components of good writing in the English language. The sessions will cover (1) paragraphing, (2) active and passive voice, and (3) the use of articles. Participants will be given exercises to work on during the workshop.

May 17, Workshop 2: Oral presentation skills. This session will deal with strategies for preparing papers for presentation at seminars or conferences. Participants will be asked to work in groups to prepare and make a short presentation to the class - in English. Participants should attend the whole day if possible, as the sessions are linked to each other.

May 22, Workshop 3: Writing research articles in English. These sessions will focus on the process of writing up a research article in the English language - with a possible view to submitting it for publication consideration. The blocks will cover (1) structuring a research article, (2) the literature review, and (3) managing a research project. Participants must bring: (a) reports or notes relating to a research project they have completed, or currently working on [this can be in the Japanese language], and (b) a copy of a recently published research article from a psychology journal [in the English language].

May 19, Lectures in Psychology 1: The sessions will cover (1) how memory works and its associated problems, (2) mnemonics and other strategies for improving memory, (3) the psychological meaning of fairy tales.

May 20, Lectures in Psychology 2: The sessions will cover (1) dyslexia and models of the reading process, (2) dyscalculia [mathematics LD] and other specific learning disabilities, (3) psychological explanations of mental and spiritual possession.

May 21, Lectures in Psychology 3: The sessions will cover (1) a review of selected research in academic skills development instruction, (2) the functions of university learning centres in western countries, (3) rational [non-psycho] explanations of psychic phenomena.

成果：各セッション10名程度。オークランド大学スチューデント・ラーニング・センター所長のマナロ教授により、心理学英語の集中講義が行われた。各セッションは、単独で聴講しても困らないようにモジュール化されるなど随所に工夫が見られ、高度のプレゼンテーション技法に触れる機会にもなった。

第5回 ワークショップ

「メタファーへの認知的アプローチ」

企画：楠見孝、子安増生、中本敬子

日時：2004年1月31日～2月1日

場所：京都大学百周年時計台記念館2F国際交流ホールI

1月31日(土)

10:30-10:35 オープニング 楠見 孝（京都大学大学院教育学研究科）

テーマ1 慣用メタファー

10:35-11:00 「価値評価の類似性とメタファー」 鍋島弘治朗（関西大学文学部）

11:00-11:25 「言語理解におけるイメージ図式の影響」 中本敬子（京都大学大学院教育学研究科）

11:25-11:50 「比喩理解におけるフレーム的知識の必要性—FrameNet との接点」 黒田航（通信総合研究所けいはんな情報通信融合センター）・野澤 元（京都大学大学院人間環境学研究科）

11:50-12:15 討論

シンポジウム：「メタファーを巡る理論」司会 山梨正明：京都大学大学院人間環境学研究科

「メタファー研究と認知科学の関連領域」 山梨正明（京都大学大学院人間環境学研究科）

「メタファーと多義語の記述」 瀬戸賢一（大阪市立大学大学院文学研

究科)

『心の理論』とメタファー理解」 子安増生 (京都大学大学院教育学研究科)

13:15-15:15 「身体運動意味論」 月本 洋 (東京電機大学工学部)

テーマ2 知覚とメタファ

15:30-15:55 「時間のメタファーにおける図と地の問題」 篠原和子 (東京農工大学工学部)

15:55-16:20 「空間表現語に関わる視知覚的要因: 3DCG を用いた仮想空間での心理学実験による考察」 小島隆次 (京都大学大学院教育学研究科)

16:20-16:45 「The role of metaphor in semantic extensions of sensory adjectives」 進藤三佳・村田真樹・井佐原均 (通信総合研究所けいはんな情報通信融合センター)

16:45-17:10 「共感覚表現の脳内処理モデル- 事象関連電位(ERP)による研究-」 坂本勉 (九州大学人文科学研究院)

17:10-17:35 討論

2月1日(日)

テーマ3 メタファの認知メカニズム

9:00-9:25 「面白さを感じるメカニズムの検討」 中村太戯留 (東京工科大学メディア学部)

9:25-9:50 「コミュニケーション戦略としてのメタファー - 認知と行動の観点から -」 野澤 元 (京都大学大学院人間環境学研究科)・渋谷良方 (マンチェスター大学大学院)

9:50-10:15 「共同問題解決におけるメタファの役割」 栗山直子 (東京工業大学大学院社会理工学研究科)・船越孝太郎・徳永健伸 (東京工業大学大学院情報理工学研究科)・楠見 孝 (京都大学大学院教育学研究科)

10:15-10:40 討論

テーマ4 メタファとレトリック

10:40-11:05 「提喩・隠喩・逆隠喩」 森 雄一 (成蹊大学文学部)

11:05-11:30 「認知修辞学の構想-メタファーの詩的機能を中心として-」 内海 彰 (電気通信大学電気通信学部)

11:30-11:55 「比喩の読者における創造性と想像力」 Bipin Indurkha (東京農工大学工学部)

11:55-12:20 討論

テーマ5 教育への応用

13:30-13:55 「学校現場における類推的思考の位置づけ」 平真木夫 (宮城教育大学教育学部)

13:55-14:20 「メタファー／アナロジー変容の認知メカニズム」 羽野ゆつ子 (大阪成蹊大学芸術学部)

14:20-14:45 「このワークショップにメタファーはありますか-ars としての教育詩学」 鈴木晶子 (京都大学大学院教育学研究科)・弘田陽介 (日本学術振興会)・小野文生 (京都大学大学院教育学研究科)

14:45-15:10 討論

まとめと全体討論

15:10-15:35 「メタファへの認知的アプローチ」 楠見 孝 (京都大学大学院教育学研究科)

15:35-16:00 全体討論

趣旨: 本ワークショップは、Aチームの研究課題「イメージと表象の性質と機能」におけるプロジェクトの一つとして行なった。ここでは、レトリックの問題、とくにメタファに焦点をあてて、心理、言語、教育、認知科学、人工知能などのさまざまな領域の研究者が一堂に会し、研究報告をおこない、討論を通して、その認知的基盤について検討した。本ワークショップが、メタファ研究の新たな地平を切り拓くとともに、メタファを通して、心を総合的

に理解する契機になることをめざした。

成果：学内外から約120名の参加者があった。メタファに焦点を絞った研究集会は本邦初であり、専門家によるメタファの認知研究に関する最新の話題提供と活発な討論は今後の研究の展開において大きな意義があった。

第6回 ワークショップ

「批判的思考の認知的基礎と実践」

企画：楠見孝、子安増生

日時：2004年2月8日 10:00-17:45

場所：京都大学百周年時計台記念館2F国際交流ホールIII

はじめに 10:00-10:25 楠見孝（京大） 「批判的思考の認知的基礎と実践」

テーマ1：批判的思考の概念と測定

10:25-10:50 道田泰司（琉球大） 「批判的思考の概念と測定について」

10:50-11:15 元吉忠寛（名大）・廣岡秀一（三重大）・小川一美（大同工業大）・斎藤和志（愛知淑徳大） 「大学生のクリティカルシンキング志向性に関する縦断的検討」

11:15-11:40 平山るみ（京大D1） 「批判的思考態度と認知能力が推論および読解課題に及ぼす効果」

11:40-12:00 討論

テーマ2：批判的思考の認知過程

13:00-13:25 山祐嗣（神戸女学院大） 「二重過程理論と論理的・批判的思考」

13:25-13:50 田中優子（京大M1） 「批判的思考を活性化させるメタ認知的側面」

13:50-14:15 菊池聡（信州大） 「擬似科学をめぐる懐疑的思考と批判的思考」

14:15-14:30 討論

テーマ3：批判的思考の教育：議論の指導

14:45-15:10 福澤一吉（早稲田大） 「トゥールミンの議論モデルを基礎とした言語論理教育」

15:10-15:35 中島靖治（兵庫教育大M2） 「望ましい集団討論を行うために必要な能力と志向性を高めることを目的としたトレーニング・プログラムの開発」

15:35-16:00 吉田寿夫（兵庫教育大） 「クリティカル・シンキングをキーワードとした『心のしくみについての教育』の実践」

16:00-16:15 討論

テーマ4：批判的思考の教育：論文の指導

16:30-16:55 沖林洋平（広大D2） 「学術論文読解における批判的思考の役割」

16:55-17:20 黒岩督（兵庫教育大） 「『考え方』を学ぶ小論文指導におけるフィードバックが批判的思考に及ぼす効果」

17:20-17:30 討論

まとめ 17:30-17:45 子安増生（京大）

趣旨：Aチーム主催ワークショップとして、批判的思考、論理的思考に関して、心理、教育を中心とした研究者が集まり、討論を通して、その認知的基盤と教育実践について検討した。
成果：学内外から約80名の参加者があった。批判的思考に関する研究集会は日本初であり、その認知的基盤と教育実践について、専門家による最新の話題提供と活発な討論を行ったことは、日本における批判的思考研究において大きな意義をもった。

第7回 ワークショップ

「ワーキングメモリ：基礎から応用へ」

企画：苧阪直行

日時：2004年2月28日、29日

場所：芝蘭会館

2月28日(土)

12:50-13:00 開会挨拶 苧阪直行

特別講演「現代社会とワーキングメモリ」司会 苧阪直行

13:00-14:00 篠原一光（大阪大学大学院）「交通安全とワーキングメモリ」

14:00-15:00 五十嵐一枝（白百合女子大）「ADHD とワーキングメモリ」

講演 司会 苧阪直行

15:15-16:15 渡邊正孝（東京都神経研）「ワーキングメモリと動機づけに果たす前頭連合野の役割」

一般発表 司会 苧阪直行

16:15-16:35 薦森英史・室橋春光・河西哲子・寺尾敦（北海道大学）「系列学習における視覚性記憶と運動性記憶の並列的推移」

16:35-16:55 河村暁（筑波大）・中山健（福岡教育大）・前川久男（筑波大）「児童期のLD児におけるワーキングメモリ測定の試み」

16:55-17:15 坪見博之・苧阪直行（京都大・文）「視覚的二重課題における時間処理制約」

2月29日(日)

一般発表 司会 齊藤智

9:00-9:20 板垣文彦（亜細亜大）「乱数生成課題における中央実行系機能」

9:20-9:40 岡夏樹・水主村清治・小柏博行・野川博司（京都工芸繊維大）「学習の計算モデルとワーキングメモリ」

9:40-10:00 安田達弘「ワーキングメモリと周期変動静電気外場」

一般発表 司会 苧阪満里子（大阪外国語大学）

10:00-10:20 設楽哲子・室橋春光（北海道大学）「ワーキングメモリにおける音韻ループの仕組み、発達について」

10:20-10:40 木原健・苧阪直行（京都大大学院・文）「視覚刺激呈示時間の予期性が注意実行処理に及ぼす影響」

講演 司会 苧阪満里子

11:00-12:00 大塚一徳（長崎県立大）「問題解決過程におけるリーディングスパンの個人差」

特別講演 司会 齊藤智

13:00-14:00 Prof. Robert Logie（エディンバラ大学）「Dual task co-ordination as an executive function: The cases of encoding and retrieval」

一般発表 司会 船橋新太郎

14:20-14:40 吉村貴子（大阪医療福祉専門学校）・苧阪満里子（大阪外大）・前島伸一郎（和歌山県立医科大）「失語症患者の聴覚的理解とワーキングメモリーリスニングスパンテストによる検討」

14:40-15:00 鳥居深雪・下山一郎・磯邊聡（千葉大）「軽度発達障害児のワーキングメモリの特性に応じた指導法の検討ー高機能広汎性発達障害男児と Dyslexia 男児の事例研究を通してー」

15:00-15:20 岡耕平（大阪大大学院）「知的障害者の二重課題パフォーマンス特性に関する実験的研究」

15:20-15:40 野澤元・小早川睦貴（京大大学院・人環）「digit span 課題における聴覚的・視覚的把持について」

15:40-16:00 新田統昭・船橋新太郎（京大大学院・人環）「遅延眼球運動課題に関係した前頭連合野主溝領域のニューロン活動」

16:00-16:20 渡辺由美子・船橋新太郎（京大大学院・人環）「サル視床背内側核の作業記憶における役割」

16:20-16:40 澤木梨沙・室橋春光・河西哲子・宮本環・寺尾敦（北海道大大学院）「event-related fMRI を用いた Go/No-go task 時の脳活動に関する検討ーADHD 傾向低群と高群の比較ー」

16:40-17:00 大塚結喜（京大大学院・文）・近藤洋史（京大大学院・文、NTT コミュニケーション科学基礎研究所）・森下正修（京大大学院・文、京都府立大学福祉社会学部）・苅阪直行（京大大学院・文）「ワーキングメモリの注意制御を支える神経基盤に対する加齢の影響」

17:00- 閉会挨拶 船橋新太郎

成果：今回はワーキングメモリとその関連領域の応用研究を中心に国内のこの分野の研究者を集めて開催された。昨年の基礎研究中心の国際ワークショップを受けて今回は教育、障害、交通などの分野においてワーキングメモリの研究を行っている方々に集まっていただき、ワーキングメモリ研究がどのように社会貢献できるかを探ってみた。ワーキングメモリ研究の学術的成果を社会に還元することを目的としたものである。特別講演として英国エディンバラ大学の Bob Logie 教授がアルツハイマー患者のワーキングメモリ機能について、大阪大学の篠原助教授が交通安全とワーキングメモリについて、白百合女子大学の五十嵐教授が ADHD（注意欠陥多動症候患者）についてそれぞれ講演を行った。その他都立神経研に渡邊主任研究員が動機づけとワーキングメモリについて、長崎県立大の大塚助教授が問題解決とワーキングメモリについて講演を行った。いずれも子供の教育、障害、交通安全にワーキングメモリが重要な役割を果たすことを示唆する講演であった。日本経済新聞社の取材もあった。2 日間の延べ参加者数は北海道から長崎まで 100 名、懇親会参加者数は 29 名であった。

第 8 回 ラウンドテーブル（開催予定）

「空間認知発達のミッシングリンクを求めて」

企画：子安 増生、杉村伸一郎（広島大学）、渡部 雅之（滋賀大学）

司会者：山本 利和（大阪教育大学）

話題提供者：渡部 雅之（滋賀大学）

杉村伸一郎（広島大学）

Gavin Bremner（Lancaster University）

指定討論者：鈴木 忠（白百合女子大学）

日時：2004 年 3 月 23 日 15:30-17:30

場所：白百合女子大学

内容：空間認知の発達は、乳児期と幼児期以降が別個に研究されることが多く、乳児期から児童期にかけての発達のコースやメカニズムに関して、積極的に検討されることは少なかった。したがって現在のところ、知覚・運動的な空間認知と表象・操作的な空間認知との発達の関係に関しては、ほとんど明らかにされておらず、乳児期と幼児期の間が Missing Link になっている。

そこで本ラウンドテーブルでは、対象の永続性課題などにより得られた乳児期の知見と、3つの山問題などにより得られた児童期の知見とを関連づけ、Missing Link を探索することを目的とする。具体的には、まず渡部氏が視点取得の萌芽に関して、次に杉村が空間定位と空間表象の発達に関して話題提供を行い、最後に Bremner 氏から、これまでの Bremner 氏の研究紹介とともに、乳児期から児童期にかけての空間認知の発達をどのように考えるかに関して話題提供をしていただく予定である。

第 1 回 国際ヤング・サイコロジスト・ワークショップ

「認知の発達と進化」

企画：田中正之、遠藤利彦

日時：2003 年 7 月 26 日～27 日

場所：京都大学文学研究科第 3 講義室

July 26, Saturday

13 : 00 Opening remark. Kazuo Fujita (Kyoto University)

Session: Comparative Perception & Cognition

13:10-13:40 Atsuko Saito, Akichika Mikami, Yoshikazu Ueno, Shoji Kawamura, Kanthi Arum Widayati, Bambang Suryobroto, & Toshikazu Hasegawa (University of Tokyo)
"Advantage of dichromats over trichromats in discrimination of color-camouflaged stimuli"

13:40-14:10 Katherine A. Leighty (University of Georgia) "Cross-dimensional object recognition"

14:10-14:40 Dalila Bovet, & Jacques Vauclair (Université Paris X , Université de Provence)
"Comparing the categorization and abstraction abilities of baboons and three-year-old children."

Session: Comparative Social Cognition

14:50-15:20 Emilie Genty (CEPE UPR/CNRS 9010) "Study of a kind of self-control in lemurs (*Eulemur macaco* and *Eulemur fulvus*)."

15:20-15:50 Hika Kuroshima, Hiroko Kuwahata, & Kazuo Fujita (Kyoto University)
"Learning from other people's mistakes: Could monkeys learn wisdom by the follies of others?"

15:50-16:20 Takahiro Hisazaki (Kyushu University) "Self-other Differentiation, Embarrassment, and Empathy in Toddlers"

Session: Behavioral development & Cognition of Motion

16:30-17:00 Makiko Uchikoshi, & Tetsuro Matsuzawa (Kyoto University) "Behavioral development of agile gibbons: The first five years after the birth"

17:00-17:30 Foucart Julie, Bril Blandine, & Matsuzawa Tetsuro (INSERM 483, Paris, France)
"Nut-cracking in human and non human primates: Comparative analysis of the nut-cracking movement in relation to the skill level-problematic, hypothesis and protocol"

17:30-18:00 Yuko Tokitsu (Kyushu University) "The "expertise eye" of archaeologists : Experts' scanning patterns in observing pottery and their memory representation."

July 27, Sunday

Poster Session (Lecture room No1)

Session: Early Development in Infants

11:00-11:30 Masako Myowa-Yamakoshi, Masaki Tomonaga, Masayuki Tanaka, & Tetsuro Matsuzawa (Kyoto University) "Development of face processing in infant chimpanzees (*Pan troglodytes*)"

11:30-12:00 Naoko Dan (The University of Tokyo / JSPS) "Infants' understanding of televised images: Can infants utilize information from TV in a real-world task?"

12:00-12:30 Tessei Kobayashi, Kazuo Hiraki, Ryoko Mugitani, & Toshikazu Hasegawa (University of Tokyo) "Intermodal arithmetical ability in human infants: 1 object plus 1 tone"

Session: Social Cognition in Human Children

13:30-14:00 Atsushi Senju, Toshikazu Hasegawa, & Yoshikuni Tojo (University of Tokyo)
"Eye contact detection in children with autism"

14:00-14:30 Victoria Talwar (Queen's University) "The Development of Children's Lying Behaviour"

14:30-15:00 Tanya Macgillivray (Emory University) "Cultural and Behavioral Origins of Teaching: Implicit Theories of Mind."

Session: Social Cognition (Japanese)

15:10-15:40 Atsuhiko Funabashi (Kyushu University) "On the early development between locomotion and social development: In relation to change into parenting."

15:40-16:10 Hajimu Hayashi (JSPS / Kyoto University) "Effects of understanding other's mental states on moral judgment of commission and omission"

16:10-16:40 Daisuke Kosugi (Kyoto University) "Eighteen- through 22-month-old infants

differentially imitate their mothers' actions"

16:50 Closing remark.

趣旨：国内外の若手研究者の研究交流を目的としたワークショップを企画した。このワークショップでは、認知能力を進化史的、または発達的な視点から研究をおこなっている若手のポスドク、大学院生の方に各人の研究内容をご紹介いただく。若手同士、肩肘張らない雰囲気の中で、お互いの研究にたいする意見交換を通じて今後の研究の発展を望む。

成果：招待の口頭発表者 18 名と、一般募集のポスター発表者 26 名を含めて約 60 名が参加し、盛会となった。同世代の若手研究者が集まったこともあり、各発表について英語による活発な議論がおこなわれた。また、会場の設営や懇親会などは、大学院生が自ら企画し運営した。教育的見地からも、きわめて有意義なワークショップとなった。次年度以降の連続開催も検討されている。

■ シンポジウム

第 5 回 国際シンポジウム

「人生サイクル・いのち・他界のイメージ ―多文化の視点から」

企画：やまだようこ

日時：2003 年 6 月 8 日 10:30-17:00

場所：芝蘭会館

趣旨：ライフ（人生・いのち）のイメージは、私たちの心のなかの個人的表象のようにもみえますが、社会・文化的文脈のなかで形成されてきた死生観や生命観や他界観とふかくむすびついています。心の世界は人間の内側にあるのではなく外側にもひろがっているといえましょう。描画イメージ、図像表象、物語をもとにした、人生サイクル・いのち・他界のイメージについて、多文化を重ねあわせた視点から考えてみませんか。

<講演と討論> 10 時 30 分-12 時

司会 やまだようこ（京都大学 生涯発達心理学）

講演「子どもが他者と出会うとき ―宮沢賢治を手がかりに」

矢野智司（京都大学 教育人間学）

<シンポジウム 多文化の視点からみる他界とたましいの表象>

13 時 30 分-17 時

司会 戸田有一（大阪教育大学 教育心理学）

話題提供「日本文化における他界とたましいの表象」

小松和彦（国際日本文化研究センター 民俗学）

「この世とあの世のイメージー日本・ベトナム・イギリス・フランスの描画から」 やまだようこ（京都大学 生涯発達心理学）

「日欧における『生まれ変わり』ーイメージの由来を探って」

カール・ベッカー（京都大学 比較宗教学）

指定討論 加藤義信（愛知県立大学 発達心理学）

伊藤哲司（茨城大学 社会心理学）

成果：参加人数は約 150 人。一般参加者も含めて会場に入りきれないほど多くの方々が集まった熱気のなかで、多文化的な視点から「死」「他界」「生命観」にかかわる講演とシンポジウムが行われた。学際的、国際的な視野から、日本、ベトナム、フランス、イギリスの具体的なイメージ画をもとに「他界観」を扱った心理学的な実証研究はオリジナルなテーマであるだけに関心も高く、熱心な討論が行われた。

第 6 回 国際シンポジウム

「無意識とイメージの事例研究」

日時：2003 年 9 月 13 日 14:00－17:00

場所：京都国際会館 Main Hall

趣旨：本シンポジウムにおいては、まず、事例提供者より『人間関係を主訴に來談した女性の夢に添う面接過程』について報告して頂く。その報告をもとに、ユング派の立場から W・ギーグリッヒ先生、ラカン派の立場から P・ビドマー先生、対象関係論学派の立場から藤山直樹先生のお三人の指定討論者に、「無意識とイメージ」をめぐってご討論頂く。

事例研究の神髄は「個」をどこまでも尊重するところにある。そこに普遍性との出会いが生じる。それぞれの理論の視点から見えてくるものが明確にされることによって、そこに新たなものが現れ出てくることを期待したい。

司会者：東山紘久（京都大学）・伊藤良子（京都大学）

通訳：河合俊雄（京都大学）

シンポジスト

事例提供者：牧 剛史（京都大学大学院教育学研究科）

指定討論者：Wolfgang Giegerich（ユング派精神分析家、ドイツ）

Peter Widmer（ラカン派精神分析家、スイス）

藤山直樹（対象関係論学派精神分析家、上智大学）

参加人数：約 1,800 人

成果：一つの事例を、ユング派、ラカン派、対象関係論学派と理論的立場の異なる視点から一同に検討するという斬新な試みにより、心理療法過程における夢や無意識について、より専門性の高いシンポジウムとなった。また、事例研究を深めるという心理臨床学の原点に立ち戻る討論の場となった。

第7回 シンポジウム

「現代社会と心理臨床」

企画：伊藤良子

日時：2003 年 9 月 15 日（月）14:00－17:00

場所：京都国際会館

講師：

司会者：藤原勝紀（京都大学）・伊藤良子（京都大学）

話題提供者・事例提供者

遺伝子診療と心理臨床

藤田 潤（京大病院遺伝子診療部）

駿地眞由美（京都大学大学院教育学研究科）

医療少年院と心理臨床

西口芳伯（京都医療少年院）

石原 宏（京都大学大学院教育学研究科）

物忘れ外来と心理臨床

武地 一（京大病院老年内科）

西堀智香子（京都大学大学院教育学研究科）

久保田美法（京都大学大学院教育学研究科）

指定討論者：マーク海野（オレゴン大学）

河合隼雄（文化庁）

講演要旨：現代社会は、超高齢世代の増大、高度な技術革新、若年犯罪の質的变化など、人間の歴史がかつて経験したことがない状況に直面している。これらの重要課題に取り組んでいる3つの場、「遺伝子診療」「医療少年院」「物忘れ外来」は、心理臨床が果たす役割も大きい領域であるが、制度的に十分な関わりができていなかった。そこで本シンポジウムでは、これら3つの場における心理臨床実践の新しい取り組みについて事例報告をし、各領域の専門家から最新の状況について話題提供をしていただく。そして、宗教心理学と心理臨床学の

観点から指定討論をいただき、これら新たな領域との対話を深めることを試みる。

参加人数：約 1,800 人

シンポジウムの成果：身体と心の双方を含んだ人間という捉え方から、「遺伝子診療」「医療少年院」「物忘れ外来」の各領域の取り組みが示された。それぞれの発表とそれに続く指定討論、全体討論では、現代社会が直面している複雑な問題を表面的に扱うのではなく、人間主体に関わる問題として、深く本質的に触れる場となり、参加者からは大変好評を得た。

第 8 回 国際シンポジウム

「Diversity of Cognition: Evolution, Development, Domestication, and Pathology」

企画：藤田和生、板倉昭二

日時：2003 年 9 月 26 日、27 日

場所：芝蘭会館

趣旨：認知は優れた神経系を持つ生体が獲得した外界への適応の一形態であり、身体的な適応と同様に、生体の生きざまにより多様な放散を遂げてきたものと思われる。このシンポジウムでは、そうした認知の多様性を進化、発達、家畜化、病態といった諸側面から捉えて理解を深め、心というものが持つ無限の可能性を探ることを通じて、心の解明への寄与を目指す。

September 26

8:50 AM Opening remark Kazuo Fujita (Kyoto University)

9:00-11:00 AM Session Topic: Visual Perception in a Comparative Perspective

Session Chair: Kazuo Fujita (Kyoto University)

"Object perception in pigeons: Control by color versus shape" Wasserman, Edward (University of Iowa)

"Perceptual bases for social cognition in chimpanzees (Pan troglodytes)" Tomonaga, Masaki

"How do primates and birds recognize figures?" Fujita, Kazuo

11:00-12:00 PM Session Topic: Poster Session

1:00-3:00 PM Session Topic: Social Cognitive Development

Session Chair: Shoji Itakura

"To what extent do infants and children find a mind in nonhuman agents?" Itakura, Shoji

"The origins of communication and share meaning in human infants" Deák, O., Gedeon (University of California, San Diego)

"Humans and other things: How infants use properties to individuate objects" Bonatti, L. Luca (International School of Advanced Study)

3:30-5:00 PM Session Topic: Cognitive Abnormality

Session Chair: Yoshitaka Oohigashi (Kyoto University)

"Binding in visual perception and attention: Is there a link in schizophrenia?" Giersch, Anne (University of Louis Pasteur)

"What is simultanagnosia? Its paradoxical position in visual agnosias" Oohigashi, Yoshitaka (Kyoto University)

September 27

9:00-11:00 AM Session Topic: Invertebrate Cognition

Session Chair: Robert Jackson (University of Canterbury)

"Do insects associate path integration information with familiar landmarks?" Collett, Matthew (Michigan State University)

"Cognition with miniature brains: Spiders, selective attention and problem solving" Jackson, Robert (University of Canterbury)

"Visual object recognition in the praying mantis and the parasitoid fly" Yamawaki, Yoshifumi (Kyushu University)

11:00-12:00 PM Session Topic: Poster Session

1:00-2:30 PM Session Topic: Cognition of Domestic Animals

Session Chair: Ádám Miklósi (Eötvös University)

"Dog cognition: A comparative perspective" Miklósi, Ádám (Eötvös University)

"Cognition in farm animals: Do farm animals discriminate among and respond differentially to individual people?" Tanida, Hajime (Hiroshima University)

3:00-5:00 PM Session Topic: Metacognition

Session Chair: Thomas Zentall (University of Kentucky)

"Metacognition and explicit representation in nonhumans" Hampton, Robert (NIMH)

"Human metacognition and the déjàvu phenomenon" Kusumi, Takashi (Kyoto University)

"An analysis of episodic-like memory in animals" Zentall, Thomas (University of Kentucky)

5:00 PM Concluding comments James R. Anderson (University of Stirling)

成果： 学外からの参加も含めて約120名が参加した。世界各国から、ヒトを含む多様な生物を対象として研究をおこなっている第一線の研究者が一堂に会して、それぞれ最新の知見を報告し、認知の多様性を通して新しい「心」の形に関する理解を深めることができた。また、本シンポジウムの成果を、京都大学学術出版会より出版する予定で準備を進めている。

第9回 シンポジウム

「病の意味」

企画： 山中康裕

日時： 2004年2月11日 13:00-17:00

場所： 京大会館

八木 剛平（慶応大学）「精神医学史からみた病の意味」

田中 康裕（大正大学）「魂のロジックからみた病の意味」

岸本 寛史（静岡総合病院）「癌の心理療法からみた病の意味」

山中 康裕（京都大学）「心理療法からみた病の意味」

司会 山中 康裕（京都大学）

内容： 医学の革新的な進歩にともない、病に対する捉え方も大きな変化が生じている。誰しも、病を患うことや病と向き合うことの不安を抱えながら、生きているものであるが、人間にとって、社会にとって、病はどんな意味をもっているのか。このような問い、精神医学史、魂のロジック、癌の心理療法、心理臨床の各分野から、多角的に検討を行う。講演者は、各分野を代表する研究者であり、それぞれの立場から講演をしていただく。その後、ディスカッションを行い、人間存在における病の意味について、より深い考察に繋がるものになると考えられる。

参加人数： 104名

成果： 医学と心理臨床学など多方向から、「病の意味」にアプローチしたことは、病というものをより多層的なレベルで捉え、その意味を考える貴重な場となった。参加者も、心理臨床関係者、医療従事者、大学院生、学生等多岐にわたり、講師と参加者の間でも活発な討論が行われ、密度の濃いシンポジウムとなった。

第10回 シンポジウム

「学校臨床」

企画： 桑原知子、牧 剛史

日時： 2004年2月15日 14:00-17:00

場所： 芝蘭会館

講師： 徳田仁子先生（札幌学院大学教授）

後藤智子先生（福井県立大学講師）

内容：このシンポジウムの目的は「学校臨床の難しさとはなにか」というテーマを切り口としてディスカッションを行うことである。学校臨床にはどのような難しさがあるのか、そして、心理臨床家はその難しさに出会いながらどのように学校現場で定点を作っていくのか。講師の先生からは実践に基づく話題提供をしていただく。「学校臨床の難しさ」が地域によってどのように異なるのか、そしてどのようなところに共通点があるのかを、参加者全員で考える。

成果：徳田先生と後藤先生より、「学校臨床の難しさとはなにか」というテーマでご講演いただいた。学校臨床の実践に基づくご講演で、学校現場の実態や地域の歴史などが伺える、非常に興味深い内容であった。テーマとしては、「学校臨床の難しさ」から「学校の“傷”」、「学校風土の特徴」、「個人臨床と学校臨床の関係」、「心理士の専門性とはなにか」、「心理士自身の特徴（もち味）を生かすこと」などのテーマへと繋がっていった。学校という複雑な実践現場で心理士にはどのような活動が求められるのか。それを様々な角度から考える非常に有意義な会であった。異なる地域や異なる心理士との議論を重ねることにより、さらにこれらのテーマは深められるだろう。そのためには、今後も同様の企画を継続していくことが必要だと思われる。参加人数は約 30 名であった。

第 11 回 シンポジウム（開催予定）

「乳児研究は発達心理学に何をもたらすか」

企画：子安増生、渡部雅之（滋賀大学）

日時：2004 年 3 月 22 日 15:15-17:45

場所：白百合女子大学

司会者：渡部雅之（滋賀大学）

話題提供者：Gavin J. Bremner（ランカスター大学）

松村京子（兵庫教育大）

遠藤利彦

指定討論者：子安増生

内容：本シンポジウムは、発達心理学会研究交流委員会によって企画されたものであり、Bremner 氏が京都大学 21COE 心理学連合の招聘によって来日する機会を利用して開かれることになった。氏は、空間知覚・認知に関する研究で知られる。同時に、乳児期全般にわたる博識を有し、“Infancy”をはじめ乳児期に関する著書・編著が多い。今回は、Bremner 氏をはじめ、乳児期を対象に精力的に研究を行っておられる 3 名の方に話題提供をお願いし、乳児研究が広く発達心理学全般に対していかに関連し貢献できるのかを論じたい。まず Bremner 氏から、乳児の知覚・認知に関するご自身の研究成果についてご紹介頂き、あわせてこうした知見が発達心理学全般に対していかなる意義を持つのかを論じていただく。次に、生理学的な観点から乳児期の研究を進めておられる松村京子氏と、乳児期の愛着、感情発達、母子関係について研究されている遠藤利彦氏に話題提供をいただく。指定討論者は、認知発達研究の観点から、子安が担当する。

京都大学国際シンポジウム

第1回京都・ミシガン国際交流シンポジウム

「Self, Cognition, and Emotion: Toward the future of psychological research」

企画：船橋新太郎、齋木 潤、板倉昭二、S. Kitayama

日時：2003 年 12 月 6、7 日

場所：ミシガン大学心理学部

December 6 (Sat)

9:00-9:30 Opening Session

Michael D. Kennedy (Sub-President, University of Michigan)

Makoto Nagao (President, Kyoto University)

9:30-11:30 Theme 1: “Attention and Cognition”

Chaired by David E. Meyer (University of Michigan)

“Memory and attention in perception of dynamic visual events” Jun Saiki

“Action monitoring and evaluation processes of the medial frontal cortex” William J. Gehring
(University of Michigan)

“Neural Mechanisms for Inhibiting Attention” John Jonides (University of Michigan)

“Working memory: how is the information stored and manipulated?” Shintaro Funahashi

Commented by Patricia Reuter-Lorenz (University of Michigan)

13:00-15:00 Theme 2: “Emotion”

Chaired by Takashi Kusumi

“Preferences” Robert B. Zajonc (Stanford University)

“Processing social signals in a face: Interaction between facial expressions of emotion and
face/gaze direction” Sakiko Yoshikawa

“Liking and wanting components in brain and emotion” Kent Berridge (University of
Michigan)

“Culture and happiness” Shigehiro Oishi (University of Minnesota)

Commented by Phoebe C. Ellsworth (University of Michigan)

15:30-17:30 Theme 3: “Development of self”

Chaired by Masuo Koyasu

“Self and others in primates” Shoji Itakura

“Infant understanding of persons links to childhood understanding of mind” Henry Wellman
(University of Michigan)

“The infant origins of intentional understanding” Amanda Woodward (University of Chicago)

“Postmodern consciousness in psychotherapy” Toshio Kawai

Commented by Giyoo Hatano (University of the Air)

December 7 (Sun)

9:00-11:00 Theme 4: “Comparative Cognition”

Chaired by Masaki Tomonaga (Kyoto University)

“How nonhumans see the world” Kazuo Fujita (Kyoto University)

“Cooperation in wild chimpanzees” John Mitani (University of Michigan)

“Cognitive development in chimpanzees” Tetsuro Matsuzawa

Commented by Dario Maestripieri (University of Chicago)

11:30-14:00 Lunch and Poster Session (at Michigan Union)

14:30-16:30 Theme 5: “Socio-Cultural Psychology of Globalization”

Chaired by Jennifer Crocker (University of Michigan)

“Culture and point of view” Richard Nisbett (University of Michigan)

“Socialized attention: a carrier of culture?” Shinobu Kitayama (University of Michigan)

“On the psychology of globalization, with particular reference to food” Paul Rozin
(University of Pennsylvania)

“Social institutions as mediators of the micro and the macro” Toshio Yamagishi (Hokkaido University)

Commented by Hazel R. Markus (Stanford University)

16:30-17:30 Closing Session

18:00- Group Meetings and Dinner

概要：平成15年12月6日（土）－7日（日）の2日間、ミシガン州アナーバー市のミシガン大学心理学部内大講義室で開催された。21世紀COEプログラム・心理学連合のメンバーを中心にシンポジウムを計画することになったことから、テーマを「自己、認知、情動」とし、21世紀の人間が直面する「人のこころ」の問題を中心課題としてとりあげた。主催者である京都大学と主催地であるミシガン大学の心理学関連教官が中心になり、5つのテーマ（注意と認知、情動、自己の発達、比較認知、国際化の社会心理学）を中心とするシンポジウムを実施した。シンポジウムは、20名の講演者（日本からの講演者8名、うち京大から7名。アメリカ在住の講演者12名、うちミシガン大から8名）と5名のコメンテーター（日本から1名、アメリカから4名）により、各テーマとも高レベルの研究発表と非常に活発な討論が実施され、講演者ばかりでなく一般の参加者にも大変有意義なシンポジウムとなった。また、7日の昼休みを利用して参加者によるポスター発表も行われ、総数88のポスター（うち42は京大からの参加者によるもの）の前で活発な討論が行われた。本シンポジウムの事前参加登録者数は166名であったが、当日登録者30数名の参加により、2日間にわたってのべ200名近い参加者を得た。また、京大からは、長尾総長をはじめ、心理学連合の教官13名、心理学関係の大学院生38名が本シンポジウムに参加した。今回のシンポジウムは、幸いにも両大学の参加者にとって大変有意義なものになり、今後実施が計画されている両大学間での研究協力を推進する上での大きな、そして強力なステップになった。

参加人数：約200名

成果：今回のシンポジウムの直前に、両大学間で学術交流に関する覚書が調印されたこともあり、様々な機会を利用して、両大学間で実施していく今後の研究協力の具体的な方策についても活発な討論を実施した。また、今回のシンポジウムでは両大学の学生による交流にも重点を置き、電子メールによる学生どうしの情報交換、前日に開催された分野別プレ・セミナーでの研究発表や討論、学生同士の懇親会の開催などを計画した。短い滞在時間ではあったが、ミシガン大学の学生の協力を得て、参加した京大の学生には大変好評を博した。大学院生の研究交流のきっかけになることが期待される。